

## エリスの話

エリス (Havelock Ellis) はわたしの最も佩服する思想家である。しかし彼の生涯をわたしはあまりよく知らない。ただ彼自身が十五歳の時に初めてスウィンバーン (Swinburne) の『日の出の歌』を読んだと言うのを見れば、計算するとおよそ一八五六年ごろに生まれたことになる。わたしが最初に見たのは彼の『新精神』<sup>i</sup>で、スコット叢書の一冊で、価一シリングであった、近ごろアメリカの現代叢書に収められた。その次は『随感録』<sup>ii</sup>に『断言』<sup>iii</sup>である。この三冊はすべて文芸思想に関する批評で、このほかに両性、犯罪、および夢の研究があり、専門の著述であるが、いずれも至る所に彼の文化に対する明智ある批判があるのも、とても貴重である。だがその最大の著作はやはり六冊の『性の心理研究』ということになろう。そうした精密な研究はあるいは他の人にもできるかもしれないが、そのような寛広な眼光、深厚な思想に至っては、実に極めて得がたい。われわれはこれらの学問についてはもともと素人であるが、彼の言論を読めば、少なくない利益を得られる。わたし個人としては様々な経典が束になってくれたものよりもっと多いと、確実に言える。しかしこのような思想は、道学者の群衆の面前では、理解されにくいのみならず、当然の事として迫害を受けるだろう。だからこの研究の第一巻が出版されるや、即座にイギリス政府の発売禁止を食らい、後で改めてアメリカの医学書店が発行し、ようやく出版することができた。この大著は当然青年の読物ではない。ただ常識を完備した成人なら、読めば必ず得るところがあるだろう。道学者の中国に於ける流毒は決してイギリスの清教思想に劣らない。したがって健全な思想の養成は切要な事である。

エリスは宗教の禁欲主義を排斥するが、禁欲も亦た人間性の一分子だと考える。歓楽と節制の二者は併存し、且つ相反することなく実に相成っている。人間には禁欲の傾向があるから、それによって歓楽の過大を防いでおり、そして歓楽の程度を増している。彼は「聖フランチェスコとその他」という論文で、“この二者（即ち禁欲と耽溺）の一をその生活の唯一の目的とする人は、まだ生活をする前にすでに死んでいる。先ずその一を極端にまで推し進め、それから転じて他に向う人は、その人こそ真に人生とは何かを理解し、やがて模範的な高僧と記念されるだろう。しかし終始この二重の理想を尊重する者こそ、生活の方法を知る明智ある大師なのだ。……一切の生活は建設と破壊であり、取り込みと付与であり、永遠の構成作用と分解作用との循環である。真なる生活をしようとするれば、われわれは大自然の豪華と厳しさを模倣しなければならない。”彼は上でも又次のように言ったことがある。“生活の芸術は、その方法はただ微妙に取得と放棄という二者を混和することにしかない、”と、簡明にその考えを説明できている。<sup>iv</sup>

『性の心理研究』第六巻の跋文の末尾に二節の言葉がある。“ある人々はわたしの意見をあまりに保守的だとするだろうし、ある人々はあまりにも偏激だとするだろう。世にはいつもとても熱心に過去にしがみつこうとする人がいるし、また常に熱心に彼らの想像する未来を獲得しようとする人もいる。しかし明智ある人は、二者の間に立って、彼らに同情できるが、われわれは永遠に過渡の時代にいることを知っている。いかなる時であれ、現在は一つの交点で、過去と未来が出会う処であり、我々は二者に対していずれにも抗争や肩入れなどはできない。世界があつて

伝統がないなどはありません。亦た生命があつて活動がないなどありません。まさにヘラクレイトス（Herakleitos）が現代哲学の初期に言ったように、われわれは同一の川の流に二度水浴みすることはできないのである。われわれが今日にあつて知っているように、川の流はもとより断えず環流しているのだけれども。一刻として新しい朝の光が地上に射さないときはないし、また一刻として日没を見ないときもない。最もよいのは静かにかの微かな朝の光に挨拶をして、むやみに前に向つて走ることなく、また落日に対しては、それが曾て朝の光であつたのが死に垂としてゐる光明であることに感謝を忘れてはならない。”

“道徳の世界では、われわれ自身が光明の使者であり、宇宙の行程がわれわれの身に実現するのである。短い時間だけれども、もしわれわれが望むならば、われわれは光明によってわれわれの行程の周囲の暗闇を照らすことができる。まさに古代の炬競走——これはルクレティウス（Lucretius）から見れば一切の生活の象徴のようである——におけると同様にわれわれは手に炬を持って、道に沿つて前に走る。まもなく後から人がやつて来て、われわれに追いつくだろう。われわれのすべての技巧は、どのようにしてその光を固定した炬を彼の手引き渡すかにある。そしてわれわれ自身は暗闇に没し去るのである。”

この二節の言葉がわたしは最も好きで、とてもよい人生観だと思う。現代叢書本の『新精神』の巻頭には、これを題詞（但し第一節はやや短くしてある）として掲げてある。あるいはエリスの代表思想と言つても不可ではないかもしれない。最近『人生のダンス』の序でも似た言葉があつて、大意は、ヘラクレイトスは人は同じ川の流に二度水浴みすることはできないと言つた、だがわれわれは実際、同一の方向と形状を持った、一つの連続した川の流を認めざるを得ない。河中の常に變化して已まない水浴みをする者についても同様に言うことができる。“したがつて、世界には變化があるだけでなく、亦た統一もある。多くの違ひと一つの固定はともにその平衡を保つ。これが生活が必ずダンスとなる所以である。なぜならダンスはまさしくそうであるからだ。永久につづく微々たる變化の動作、そして全体の形状とはもとより粗忤しない。”

（上の言葉は、言い方があまりはつきりしない所があるが、訳文が意を達していないためであつて、その責任はすべて訳者にある。 民国十三年二月）

張崧年君の指摘をたまわつて、エリスは一八五九年生れだということが分つた。特にここに補う。 （民国十四年十月）

※初出：1924年2月23日『農報副刊』

---

i, ii, iii 『新精神』 『随感録』 『断言』 それぞれ『The New Spirit(1890)』、  
『Affirmations(1898)』、『Impressions and Comments(1914-1924)』

iv 「聖フランチェスコとその他」は、AffirmationsのSt. Francis and Others. p. 220より引用。